



TITLE:

宋代の塌坊とその由來

AUTHOR(S):

日野, 開三郎

CITATION:

日野, 開三郎. 宋代の塌坊とその由來. 東洋史研究 1968, 27(1): 1-20

ISSUE DATE:

1968-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152764>

RIGHT:

東洋史研究

第二十七卷 第二號 昭和四十三年六月發行

宋代の場坊とその由來

日 野 開 三 郎

一

遠隔地間商業の躍進時代である唐代に於いて此の躍進に大きな役割を果していたものに邸店がある。邸は店の大きなものをいい、従って邸と對置せられた店は小さなものをいうが、單獨に用いられた場合の店は大小の邸店を含めた一切のものを指す用法をもっていた。邸店は今日使用する邸宅や店舗の意味ではない。今日いう所の店舗は肆・舗などと呼ばれ、邸店は此れとはっきり區別せられていた。そこでこの邸店の基本業務を見るに、人を宿泊せしめる旅宿、飲食を供する料飲、人の荷物を預り保管する倉庫業の三つを兼ねており、その何れを缺くも邸店と呼べないものであった。食飲は憩泊の客に對してのみならず、一般の人に對しても營業せられ、こうした食飲や食飲料の販賣に經營の重點を置く邸店があり、食店・賣餅店・賣漿店・肉店・酒店等はそうした料飲や食飲料販賣に大きく乗出した邸店をその専門營業別によつて名づけた名稱である。衡要の邸店は收利が大きく、従つて富豪は争つてその經營に乗出し、中にはその邸店天下に遍しといわれる程の兼併を行なっている富商さえ現れていた。貴族や權官もこうした利源としての邸店を見逃す筈はなく、殊に安史

の亂以後は軍閥としての財源漁りに汲々たる藩鎮の經營乗出しが目立っていた。邸店は坐賣の肆・舗や客商・牙人等と共に唐代商業史を研究する上に最も重要な對象とすべきものである。^①

邸店が泊客・食飲・倉庫の三業務を不可缺の基本營業とするものである以上、これら三業務の究明は邸店研究の基礎として眞先に取上げなければならぬ。所が泊客・食飲に就いてはかなり詳しい資料が得られるのに對し、倉庫業に就いては傳えられる所が甚だ乏しく、倉庫の構造や營業形態など、最も肝心な點さえも、これに觸れた資料は見出せない。そこでこうした唐代の資料不足は宋代の資料から補う外なしと考え、この立場から取上げたのが場坊である。場坊(房)は營業倉庫をいい、又その經營業者を指す語としても用いられ、文獻に出てくるのは宋代に入ってからである。従つて場坊そのものの研究は宋代の問題として扱わねばならぬが、その研究の成果を唐代邸店の基本業務としての倉庫業の考察に役立てる爲には、宋代場坊の由來の面を溯及的に追究する必要がある。

二

宋代の場坊(場房・場場)に就いては既に故加藤博士の研究があるので、先ずその大要から紹介すると次の如くである。^②

倉庫をいう場坊(房・場)の記事は、都城紀勝・夢梁錄・續資治通鑑長編・建炎以來繫年要錄等の諸書にかなり多く散見しており、それらの記事に依れば、場坊には民營のものの外に官營のものもあり、多く客商の集まる商業上の要地に設けられ、彼等の商品を預り保管して保管料を稼ぐ專業の保管倉庫で、火災盜難等に對する防衛に慎重な對策が講ぜられていたという。此の專業保管倉庫を場坊と呼んだ所以に就いて、加藤博士は場坊の字義の解釋を中心として詳しく論ぜられている。それによれば、場坊の字義は康熙字典に、「地低下也」と、「墮也」との二つがあげられており、そこから場坊の意義にも二つの説が分立して來るといふ。その第一は、「地低下也」の字義に従つて場を窖(あなぐら)、もしくは地下室と解し、場坊はそうした地下の倉庫を指すとする説で、加藤博士の紹介によれば、此の説は、*The New China Review*,

Vol II, No. 2 に載せられた Moule 氏の “The Fire-Proof Warehouses of Lin-an” と題する小論文に見えており、Moule 氏は塲を地下室（窖）と解し乍らも、杭州（臨安）の地は砂が多くして窖を造るに適しないことを指摘し、又、マルコポーロ旅行記の行在（^{キンザイ}臨安）の條に、石を以て高塔（Lofty tower）を造り、貴重品を蓄える記事のあることを示して、塲坊は此の高塔に當るらしいけれども、塲字にはその様な意味がないのを異しんでいるという。即ち Moule 氏は塲を地下室と解し乍らも此の解釋に一沫の懸念を残し、寧ろ塔型の倉庫と見るべき可能性のあることを示しているのである。加藤博士は此の説を紹介したのち、その地下室とする解釋を強く否定している。第二は、「墮也」の字義を採り、此の「墮」を物の墮ち倒れて地に着くの意に敷衍して解し、それから轉じて地上に物を置くの意を生じ、それから更に再轉して物を貯藏する意味にも使われる様になったと想定し、この想定の上に立つて塲坊とは貯藏倉庫の意味であると解釋する説で、第一説を強く否定した加藤博士自身の立説である。此の兩説の是非は、その論據として出されている資料の限りに於いては俄かに判定し難く、確定的結論を下す爲には塲字の倉庫的使用例の今一段の蒐集檢討が必要である様に思われる。

中國では穀物を窖に貯藏することが早くから行なわれ、且つ南北を通じてかなり一般化し、宋元時代に至るも尙盛んで、當時の農書の中には窖の造り方やその中に穀物を貯藏する時の心得などを記し、窖の繪圖を添えているものさえある。こゝうした長年の慣行から、本來はあなぐらを指す窖が穀物倉庫一般を指す語として廣く用いられる様になっていた。唐代の文獻中から若干の用例を示すと、資治通鑑^{卷二}二七建中三年四月の條に、驕藩討伐の功を急いだ德宗がその性急の故に却つて政局を混亂せしめ、數年にわたる所謂建中の亂を惹き起し、財用困窮して動きがとれなくなつた爲、有名な間架錢・除陌錢等を課徴すると共に、富裕者を對象として民間の蓄藏を強制的に借上げることとした次第を記し、民戸現有の資産に封印したことを述べて

凡蓄積錢帛粟帛者。皆借四分之一。封其櫃窖。

胡注。蓄錢帛者以櫃。積粟麥者以窖。

とある筈は、あなぐら倉庫は勿論、あなぐらでない穀物倉庫をも含んだ筈の一用例である。つまり右の「封窖」は民間の穀物を強制括借する爲に一切の穀物倉庫を封印したことをいっているのである。又、開元二十一年、それまでは各州毎に船を仕立てて租粟を積み、遠く江淮から諸水を航して中央に長運直達していた漕運法を改め、江・淮・黃の諸水と大運河との各接會點に倉庫をおき、そこで船上の粟を逐次積み換えて中央に遞送する轉般制に切り換えた時、此の積み換えの爲に必要な右倉庫の建設維持費を新たに民丁に賦課することとしたが、此の倉庫經費は、冊府元龜^{卷四}九八邦計部・漕運の項の此の年の條に

今日天下輸丁約有四百萬人。每丁支出錢百文。充陝洛運脚。五十文充營窖等用。

とあり、同書^{卷四}八七邦計部・賦稅・開元二十三年六月の條の敕文中に

自今已後。凡是資課・稅戶・租脚・營窖・折里等。應納官者。並不須令出見錢。云云。

とある如く、營窖錢と呼ばれていた。所で轉般用の倉庫は決して窖樣式一點張りではなく、轉般倉の模様を傳えている史料は寧ろ地上倉庫であるものが殆どである。従つて此の窖もあなぐらの外にあなぐらでない穀物貯積用倉庫をも併せ指していた一例といえる。つまり窖はあなぐらであるが、穀物倉庫は多くあなぐらが用いられていたことから、廣く貯穀用倉庫を指す語として用いられる様になり、あなぐらでない貯穀倉庫をも併せ含める用法を生じていたのである。こうした貯藏用あなぐらの傳統的な技術を考えると、場の「地低下也」の義をとつて、場坊を地下室的構造の倉庫なりとする解釋も強ち捨て難いものとなる。即ち宋代の保管倉庫業者の倉庫は地下室的構造を共通の典型樣式としていたことから、轉じて倉庫業者の倉庫を廣く場と呼ぶに至ったのではないかとの推測が検討に値してくる様に思われるのである。然し場を地下室と確定し得る肝心の資料が未だ檢出せられておらず、そこに加藤博士の否定説が生れた所以がある。

次に場坊を貯藏倉庫の意味をもつ語とする加藤博士の説は、此の説の根據となる場義「墮」から「地上に物をおく」への轉訛過程の説明に博士の獨奔的な牽附が感ぜられ、直ちに共鳴することがためらわれる。本來、倉庫は貯積用に作られ

るものであるから、場坊の語義を解くには、その目的としての貯蔵をもち出すよりも、やはりその貯蔵物件やそれに伴う倉庫の造り方等に由來を求むべきであろう。

場坊を考へる場合、併せて參考にしなければならぬのは、同じ宋代の倉庫を指す用語に埒場・堆埒場があるということである。この埒場に就いても加藤博士の研究があるので、それによつて大要を述べると、埒の本義は射埒、即ち弓の射的で、太平廣記^{卷二}五〇談諧部・鄧玄挺の項に、啓顔錄に出ずとして、「射數十發。皆不中埒」とあるから、唐宋時代でも此の本來的な用法のあったことが察せられるが、同時に同書^{卷二}四三治生部・寶義の項に、乾臙子に出ずとして、古家を始末したことを述べて、「析其瓦木、各埒一處」とあるから、集めて積み上げる意味にも用いられていたことが確められる。倉庫を埒場・堆埒場というは、その堆との連用から推して、この集積の意味に依つて見なければならぬ。従つて埒場とは預つた荷物を積み上げて保管する様な構造の倉庫であつたことになる。そしてこの埒場が場坊と並んで兩々相用いられていたのは、同じ保管倉庫にもその構造に違つたものがあつて、その相違を表す必要があつたことであらうから、場坊と呼ばれる倉庫は右の埒場とは違つたもの、即ち集積貯蔵の倉庫とは區別せられたものであつたことになる。要するに、場坊を以て地下倉庫の意味をもつ語なりとし、又貯蔵倉庫の意味をもつとする解釋は、何れもその論據に確實性がなく、場坊は全く新たな考察から出發すべきもので、その出發に當つては集積用倉庫の意味をもつ埒場とは區別せられていたものであることを知っておかなければならぬのである。

三

場坊の倉庫としての構造を探る上に最も有力な資料となるのは、夷堅丁志^{卷六}泉州楊客の項の記事である。その大筋は、泉州の楊客は海上貿易に活躍していた大商人で、風濤の厄に遭う毎に神靈に加護を祈り、必ず塔廟を建てて謝禮するから助けてくれと誓っていたが、難を免れるとケロリとして約束を履まなかつた。所がそれを繰返しているうちに夢の中でそ

れまでに約束をした諸神が現れて實行を迫り、若し實行しなければ彼の蓄積した財産は諸神の加護のためものであるから取上げるといった。同じ夢を何度も見た楊客は次第に自分の資産が氣になり出した。そこで彼は四十萬緡に相當する種々の商品をもって錢塘江に入港すると、その荷物を抱劍街の主人(邸店)唐翁の家に預け、自分は他の客館に宿ったが、尙用心するに如くはなしと思ひ、主人唐翁に事情を述べ、四十萬緡分の商品を、特に高貴な三十萬緡分と然らざるもの十萬緡分とに分け、三十萬緡分の安全を特にはかったが、結局、神罰によって兩者共に全部類焼の厄にあひ、遂に自殺したという。此の話の筋の中で場の構造に關係ある記事は左の部分である。

舉所寶沈香・龍腦・珠琲・珍異。納于土庫中。他香・布・蘇木、不減十餘萬緡。皆委之庫外。是夕大醉。次日聞外間火作。驚起走登吳山。望火起處尙遠。俄頃間已及唐翁家。楊顧語其僕。不過燒得蠢重。良久見土庫黑煙直上。屋即摧塌。烈焰互天、稍定還視。皆爲煨燼矣。遂自經於庫牆上。

頗る長いので要旨を順次に條書すると

- (イ) 高價な三十萬緡分の品を土庫に納れ、他の粗重品十萬緡分を土庫外に置いた。
- (ロ) 近火が主人唐翁の家に及んで土戸外の十萬緡分を焼いた。
- (ハ) 預け主の楊客は此の時尙土庫中の物は安全であると信じていた。
- (ニ) 土庫を覆う屋が焼け落ちて塌を推いたため、土庫の中の高價品も亦焼失した。
- (ホ) 落膽した預け主の楊客は焼けた庫牆の上で自殺した。

となる。これによれば屋内の一部に更に土庫が造られ、その土壁は焼けあとで男が上って自殺することができる程の分厚いものであったこと、場とは此の屋内築造の土庫のことであること等が知られる。厚い土壁造りは盜難や火災に備えたもので、さればこそ預け主の楊客は最後まで安心して居たのである。土庫は屋内の一部を占め、従つて此の土庫の外は尙倉庫内であつたことになる。高貴品三十萬緡分を土庫に入れ、粗重品十萬緡分を庫外においたというが、此の土庫外においた

所は此の土庫を抱有する倉屋内であつたと解せられる。分厚い土壁造りは我が土藏に似ているが、それが倉屋内の一部に造られていたこと、逆にいえばその上に此れを覆う屋が建つていたことに於いて土藏とは造りが大きく違つていたといえる。場がこの様な土庫を指していたものとすれば、それは地下室とは全く別のものとなる。

土壁造りの場は土場といわれ、宋代には右に述べた營業用の大きな土場の外に、個人用の小土場の例も傳えられている。文化の^{二九}所載、愛宕教授「洪邁夷堅志逸文拾遺^(一)」の盧熊撰「洪武蘇州府志」所收逸文、「天津橋丐者」に見える記事はその適例で、先ずそこに記されている話の大筋を紹介すると、人から借りた僅かな錢を返さないため、天津橋上でひどく殴られている乞食を救い、代りに錢を拂つてやつた一士人が、その乞食から御禮として或いは酒瓶をやるといわれ、或いはそのやぶれ小屋に案内せられて酒食を振舞われたが、その餘りにもむさいのに辟易してすべて辭退し、最後に止むを得ず酒果の包みを受取つた所、あとでしらべると、その中味は悉く黄金であつたというのである。小土場のことが記されているのは、士人が招じ入れられた乞食小屋の中の様子を描寫した部分で

至其家。所居委巷窮閭。敗席障門。內設土場。上瓦盆貯酒。甌甃果蔬爲穀。

とある。この土場は乞食の小さなあばら家の中に築かれていたもので、その上側は瓦盆や甌甃の置き場とせられていたというから、丈の低い小型の造りであつたことが知られる。然しその中味は後に士人に謝禮として贈られた黄金やその他の財寶が藏せられていたわけで、土場が屋内に築かれた財寶用の土庫であることは、此の個人用小型のものに就いてもはっきり示されている。

此の様な屋内土壁造りの土場を唐代に求めるに、太平廣記^{卷四}三虎部・中朝子の項に、原化記に出ずとしてその適證が示されている。ここに記された話の大筋は、許婚女の莊を訪ねて舟行した中朝子がその六七十里手前で日が暮れ止むなく碇泊したが、あまりにも蒸し暑いので上陸し、半里餘(約三百米)の所にある廢寺の中に寢た所、たまたまそこに虎の巢があつて仔が數頭おり、そこへ母虎が娘をくわえて來たのを救つてみたら、それが自分の訪ねんとする對手の娘であつたと

いうのである。その關係ある部分の原文を引くと

去舟半里餘有一空屋。遂領一奴。持刀棒居宿焉。此乃一廢佛屋。土場尙存。此子遂寢焉。奴人於地持刀棒衛之。忽覺場下有物動聲。謂是蟲鼠。亦無所疑。中略。又照其場後。有虎子數頭。皆殺之。云云。

此の記事のうちから場・土場と呼ばれているものの構造を引き出すと

(イ) 佛屋の中に造られていたものであり、

(ロ) 主人は場に寢、此れを護衛する奴は地べたに居り、

(ハ) 場に寢た中朝子は場下に物動の氣配を感じ、場後を照して見たら虎の仔が隠れていた。

というのであるから、明らかに佛屋内に造られた土庫で、その上は寢られる程の廣さがあったのである。相當大きなものであったことが知られる。恐らく寺の寶物や資産財等を安藏し、又檀家やその他の者の寄托する財物をも藏っていたのであろう。唐代の小説巷話には寺院に大量の財貨を預けて保管して貰っている内容のものが少なからず見出される。太平廣記卷三四八鬼部・牛生の項に、會昌解頤錄に出ずとして、牛生なる者が河東より赴舉のため上京する途次、一夜を牛家とゆかりの深い或る僧院に過すこととなった際のことを記し

僧乃爲設火具食。會語久之。曰。賢宗晉陽長官。與秀才遠近。牛生曰。是叔父也。僧乃取晉陽手書。令識之。皆不

謬。僧喜曰。晉陽常(常與晉音通、義亦互通用)寄錢三千貫文在此。絕不復來取。某年老。一朝溘至。更無所附。今盡以相與。

とて、彼の叔父が先に僧院に錢三千貫を預けたままにしていたのを貰い上げたのである。これと相似た構成の話が同書卷一七定數部・李君の項にも、逸史に出ずとして載せられており、この場合は錢二千貫とあり、尙彼の叔父がこの様な巨額の錢を寺に預けたいきさつまで詳しく述べられている。こうした寺院への保管依頼が寺院や僧侶に對する大きな信頼に立っていたことは、右の二つの話の中に充分窺われるが、一方、これを引受ける寺院側には寄托に對する保管施設がなければならなかった筈である。同書卷二三詭詐部・大安寺の項に、玉堂閒話に出ずとして

唐懿宗文理天下。海內晏清。多變服私游寺觀。民間有奸猾者。聞大安國寺有江淮進奏官寄吳綾千匹在院。於是暗集其群。中略。潛入寄綾之院。云云。

とて、江淮地方の進奏官が長安の寺に千匹もの吳綾を預けていたのを盜賊連が巧に詐取した話をのせている。進奏官は進奏院の官をいい、進奏院は藩鎮が長安に置いていた在京藩邸で、藩鎮と中央政府や他の諸藩鎮との折衝に當り、そうした經費は勿論藩鎮の負擔であつたので、各進奏院にはその藩鎮から經費に充てる錢物が送付されていた。右の吳綾もそうした經費の一部として江淮にある藩鎮から送られて來たものと思われる。それを何故寺に預けたのか、その理由は判らないが、すぐ支出する必要がなく、よつて境内が廣く火災の心配の少ない安全な所をえらんだのかも知れない。何れにしてもこの様な話が巷間に多く語られていた所から推すに、大量の錢や絹等を寺院に寄托保管する風はかなり廣まっていたのであろう。それは寺院や僧侶に對する信頼感、境内の廣い靈域として火災盜難等に對する高い安全度等に依る所が大きかつたにしても、寺院側に此れに對える安全な保管施設があつたことを考えなければならぬ。土場こそ此の保管施設に外ならず、もともと寺院の寶物資財の保管用に作られたのが次第に廣く利用せられる様になつたのであろう。當時の寺院が質庫をおき利貸業を營む風のあつたことは學界周知の如くであるが、寺院の營利事業は質庫に止まらず、邸店を兼併し、更に自ら宿泊・食飲・倉庫の邸店業を營む者もあつた様で、寺院の土場はこうした經營と關聯して普及し、又大型化して行つたものと思われる。唐代寺院に於けるこうした土場の造設を考えると、倉庫業を基本營業の一とする邸店がやはり土場を設け、寧ろ此の土場を最も盛用したもののこそ邸店に外ならなかつたことが推察せられる。即ち土場の普及發展に就いての考察は邸店との關係面が重要と思われるのである。

四

倉庫施設としての土場の普及發展は倉庫業を基本業務とする唐代邸店の發展による所が最も大きかつたであらうとの推

察は當時の寺院の土塲から當然引き出されてくるが、現在管見の及ぶ所では此のことに直接言及している史料は全く検出できない。今の所、邸店の土塲盛用を論證する手掛りは跣地錢と稱する倉庫料のみである。そこでこの跣地錢に就いて考究し、それを通じて邸店と土塲との關係を探ることとする。

唐代の藩鎮はその軍閥的發展の爲に兵力の強化に専念すると共に凡ゆる財源漁りにも百法策を講じていた。有利な邸店の兼併はその一つであるが、又遠隔地間商業の發展によつて客商の擔稅力が増強する勢に目をつけ、商稅の徵收にもその觸手を伸していた。但し商稅はすべて中央の直轄下に置かれ、地方政權の徵收は法規を以て禁ぜられていたので、公然と課稅し得なかつた藩鎮は巧に他事に托して徵收の實をあげていた。その一例が跣地錢の徵收で、その課徵の主對象とせられたのは、當時急速に商品としての流通量をましつつあつた茶を販運する客商であつた。冊府元龜^{卷五}○四邦計部・關市門・大中六年正月の條に

鹽鐵轉運使・兵部侍郎裴休奏。諸道節度使觀察使置店停止茶商。每斤收跣地錢并稅經過商人。頗乖法理。今請釐革橫稅以通舟船。云云。

とあるは、藩鎮のこうした課徵を傳えた記事である。そういう所の要旨は

- (1) 店を設けてそこに茶商を泊らせ（て宿泊料をとり）、
- (2) 商品の茶を預り保管して斤單位に跣地錢をとり、
- (3) 更に商品の茶に商稅を課徵している。
- (4) これは法規に反した橫稅である。

の四點となる。跣地錢が倉庫業者としての邸店がその保管する商貨に對して要求する保管料を指していることは、一見して明らかであろう。一道の實權を握る藩鎮は所管道内の要衝に邸店を置いて茶商等の客商がそこに泊らざるを得ない様に仕向け、かくて宿泊した客商から、宿泊料・保管料をとる外、保管によつて確實に把握した商貨に商稅をも課徵し、以て

収入の増大をはかつていたのである。宿泊の客商から宿泊料をとり、預り保管した商品から保管料をとるのは、もし邸店の經營を他人名義として國法である「官員營商の禁^⑤」を形の上で避けるならば、國家としてもこれを糺彈することはできないが、商税の課徴は横税として處分の對象に取上げることができる。現に右の記事は藩鎮の商税を横税として取締るべきことを論じたものである。藩鎮としてはその商税徴收を横税糺彈の網にかからぬ様に偽裝する必要がある。もし藩鎮が此の商税を蹋地錢の中に組入れてとれば國の咎めを外らすことができる。右の蹋地錢には此の様な仕かけが含まれていたと解せられるのであるが、そのここでの考説は煩雜となるので後文に再論する。この様な仕かけは藩鎮が偽裝手段としてとった便法で、蹋地錢そのものは保管料と解すべきものである。蹋地錢の名は同書・同卷・後唐・同光三年八月戊寅の條にも

免湖南(楚國)蹋地・茶税・沿路税錢。

と見えるから、唐から五代に引續いて長く使用されていたことが知られる。所で新唐書^{卷五}食貨志には先掲冊府元龜の大中六年正月の記事と同一のことを記し乍ら蹋地錢を蹋地錢としている。加藤博士の場坊の研究に依れば、百衲本・殿本・局刻本の何れの新志も皆蹋地錢としているから、これは誤って蹋地錢としたものではあるまいという。舊唐書^{卷四}食貨志もやはり蹋地錢とあるから、蹋地錢が誤印でないことは恐らく加藤博士の説の如くであろう。若し誤ったとすれば、それは新舊兩志の作られる前にその所依となった據典に於いて既に見られたことと解しなければならぬ。舊志の所依といえは唐代の記録となるから、それは誤りではなく、この書字を以てする蹋地錢の語が唐代に通用していたことになる。然らば蹋地錢が此の蹋地錢を誤ったものかというに、唐代のみならず五代にまで蹋と書かれている所から、これ亦誤字ではあるまい。果して然らば倉庫の保管料は蹋地錢もしくは蹋地錢と書かれていたことになる。もし假に此の蹋・掬を場に換えて場地錢とすれば、場は財物保管用の土庫であるから、保管料を場地錢と呼んだ所以が自ら理解せられる。残念乍ら場地錢の用例は未検出であるが、ここに参考となるのは埽地錢である。

先に述べた如く、宋代に埽場・堆埽場と呼ばれる營業倉庫があつたことは既に加藤博士の指摘せられた所で、同博士によれば、この埽場が財物を預り保管して取る料賃を埽地錢といい、その埽場が官有の場合は埽地官錢、民有の場合は埽地戸錢といつていたという。此の名稱から類推すれば、場の料賃は場地錢と呼ばれて然るべきものとなる。唐・五代の文獻に見える蹋地錢・場地錢は必ずや此の場地錢にあたるものであろう。場地錢と書いた事例が見えないのは、倉庫料の名稱に言及した史料が全體として少ない上に、それが蹋地錢・場地錢等と書かれたことによるのであろう。場地錢を何故に蹋地錢・場地錢等と色々の書字で書いたのか、その理由を的確に説明することはできないが、少なくとも唐代では倉庫の保管料という場地錢の場合は、場・場・蹋の三字を用い、その別に必ずしも拘泥していなかったことだけは紛れないといえよう。或いは思うに、三字の字義には關係なく、ただ普通形似の文字を氣安く宛用したのかも知れない。唐代の文獻に見える倉庫保管料としての蹋地錢・場地錢が場地錢と同じものであつたとすれば、營業用保管倉庫施設としての土庫は既に唐代から普及していたことになる。

圓仁の入唐求法巡禮行記^{卷三} 開成五年七月十一日の條に

早發。行廿里許。到大于普通院斷中。行廿五里。至蹋地店宿。

とあつて、蹋地店と呼ばれる地名が記されている。此の場合の店は明らかに地名であるが、この様な店地名はその中心に所在した旅宿・食飲・倉庫業者としての店に因んで附せられたもので、唐宋時代には全國の鄉村内に地名店が夥しく簇生遍在しており、それらの中には新興の商業都市、即ち當時にいう草市に發展して行つたものが頗る多く、やがて鎮治とせられ、時には縣治や州治にまで升せられるものさえあつた。小野勝年氏の「入唐求法巡禮行記の研究」によれば、右記事に斷中の地點として記されている大于は河東の忻州定襄縣内にある要衝石嶺關の南方大孟鎮のことで、敦煌出土「五臺巡禮日記」の斷簡には大于店と見えており、北は趙家店に通じ、南は白楊樹店まで七十里であつたという。店地名の普及やその鎮への發展等はこの蹋地店附近の僅かな地名の中にさえ充分反映しているといえよう。地名店の普及とその都市的

發展とは當時の重要な社會經濟史上の問題であり、詳しいことは別に稿を設けて専考しなければならぬが、ここに取上げた地名としての蹋地店がやはりその營業店から得たものであるとすれば、この地名の由因となった營業店としての蹋地店が本稿の立場から當然考えられなければならない。

營業店に由來する地名店の多くはその營業店主の姓を採つて某家店、例えば先出の趙家店や麻家店・張家店・寶家店等と呼ばれ、此の形式のものが最も多かったが、中には營業店所在地の地理的環境を採つて關東(西)店・板橋店等と呼ばれるものや、先出白楊樹店の如くその風物を採つたもの、その他色々の形式のものがあつた。蹋地店はどう見ても店主の姓と關係ありとは思われず、その所在地の特色、もしくは營業店の特色に因んだ地名店と解する外ない。小野勝年氏の「巡禮行記の研究」に於いては、此の「蹋地」に注して、「地に伏して敵の動勢をさぐる軍事的意味」と、「蹋地錢と同じ用法の經濟的意味」との二つの解釋の可能性を提示し、その何れを採るべきかに就いては判定を留保せられている。軍事的解釋はこの地名店の所在地が重要な交通路上にあつたという地理的形勢の上に立つて考えられたものであるが、所在地の特色を採つた店地名の例が他にも多く見られる以上、此の解釋の可能性は一應認めなければならぬ。經濟的解釋は地名の由來となつた此所の營業店が蹋地錢を以て知られていたことを前提としなければならなくなるから、營業店自體の經營的特色に因つた地名店ということになる。假に第二の解釋に従つて、蹋地錢を以て知られる營業店とは現實にどの様なものが考えられるかを検討して見るに、凡そ二つのものが想定せられる。その第一は、頗る立派な場を備えて手廣く人の財貨を預り、蹋地錢の收入に經營の重點をおき、それによつて店勢を築いていた業者である。蹋地錢に經營の重點をおく大店として一般から場地店と呼ばれ、それがその地方の代表的な店となつておれば、それが地名になつて行くことは充分考えられる所である。第二は、先掲大中六年の記事に見られる如く、蹋地錢の強徵を以て問題となつた藩鎮の店である。小野氏は此の所が交通上の要地であり、延いては軍事上の要地でもあつたという。然らば藩帥がその地に對する支配權の浸透強化につとめるは必然で、その附近に軍事的な鎮兵の配駐を行なう外、ここを來往する客商を目あてに店をおき、蹋

地錢の收入をはかったと想定すべき可能性は充分考えられる。そこで右二解釋の何れを採るべきかに就いて考えるに、軍事的意味の蹋地の使用は未だ他にその事例が検出提示せられていないのに對し、經濟的な意味の蹋地、即ち保管料の意味の蹋地錢の用例は唐・五代に跨って見出され、然もそれが藩鎮の店に就いて傳えられている以上、經濟的な意味に重點をおくべきである様に思われる。そこで藩鎮の店と蹋地錢とについて回顧し、その状況を今少し詳しく詳しく觀てみる。

唐代には文武官の營利を禁ずる「與民爭利之禁」があり、これに基づいて藩鎮の邸店經營も禁止のたてまえをとっていた。冊府元龜^{卷五}○四邦計部・關市門・大歷十四年七月の條に

令王侯百官及天下長吏。無得與人爭利。先於揚州置邸肆貿易者罷之。先是諸道節度觀察使。以廣陵當南北大衝百貨所集。多以軍儲質販。列置邸肆。名托軍用。實私其利焉。至是乃絕。

とあるは、此の禁止のたてまえを示す記事である。尙右にいう「至是乃絶」は廣陵に於ける止絶を述べたもので、藩鎮の邸店經營の全面的止絶をいつているのではない。中央政府に拮抗していた強大な雄藩は勿論のこと、小藩の藩帥と雖も、或いは名義を部人に托し、或いは邸店舍屋を賃貸する形に偽裝して盛んに經營の利を求めていた。建中元年の兩稅法施行と共に、それまで藩鎮が管内出入の客商に課徴していた商稅を總て國稅に回收して藩の徵稅を禁じ、且つ「與民爭利之禁」の實行につとめ、以て藩鎮の勢力を財收面から抑制する策をとった。所が驕藩掃蕩の成功を以て有名な憲宗が即位すると、諸藩を驕藩討伐に参加せしめる爲に、以上の禁を弛め、出征用の財源を與えることとした。特に淮西節度使の討伐には元和九年十月から十二年の九月まで滿三年の歲月を費し、遠く河北の魏博・幽州・橫海・義武や河東の昭義・河東等の諸節度使に至るまで、多數の藩軍を動員したので、これら出軍の諸藩には邸店の列置や商稅の課徴を一時公認することとした。關係諸藩が競って邸店を列置し、宿泊料や蹋地錢の利を求め、更にその保管商貨に商稅を課徴したことはいうまでもあるまい。又收入をあげる爲に藩鎮が邸店經營に就いてその權力を巧に利用したことも充分考えられる。例えば藩帥が邸店をおいた地點での民營邸店を壓迫して利收の獨占をはかり、又藩の邸店使用を避けた客商に對して何らかの迫害を加

えることもあったであろう。淮西の討伐が終るや、憲宗は直ちに藩の邸店列置と商税課徴とを禁止した。舊唐書^{卷四} 食貨志・元和十二年の條に

鹽鐵使程異奏。應諸州府。先請置茶鹽店收稅。^中先所置店及收諸色錢物等。雖非擅加。且異常制。伏請。準敕文勒停。從之。

とあるは藩の邸店禁止を傳えたものであり、冊府元龜^{卷八} 帝王部・赦宥門・元和十三年正月の條の赦文の一節に

淮西側近應緣資給軍用權稅。經奏請者。一切禁斷。

とあるは藩の商税徵收禁止を傳えたものである。權稅は商税を指す唐代の用語で、商税の語が公文に登場するのは五代以後である。茶鹽店は現代邦語流に解すれば茶鹽を商う商店となるが、當時の店は必ず宿泊・食飲・倉庫の三業務を兼營するものを指し、それに限られていたのであるから、茶鹽店もその利用客商の中心が茶鹽の商人であり、従つて保管施設もそれに應じていたものの謂と解すべきである。藩鎮が既得の利源に固執してその止絶を凝るは當然であり、幾何もなく憲宗が變死したと相俟つて此の禁止は事實上長く行なわれなかつた。ただ商税のみは國税としての正規以外の徵收に對する取締りが頗るきびしかったので、藩鎮は錫地錢の名義のもとに商税分を併せ徵收する方法をとつていたこと、先に一言した如くである。先に引用した如く、冊府元龜^{卷五} 四邦計部・關市門・大中六年正月の條の鹽鐵轉運使裴休の奏文に

諸道節度使觀察使置店停止茶商。每斤收錫地錢并稅經過商人。頗乖法理。云云。

とあるは、藩鎮が元和に得た利權に固執し、穆・敬・文・武の諸宗を経て宣宗の世に至るまで長く置店收利を續けていたことを示す。新唐書^{卷五} 四食貨志には

武宗即位。^中略。是時茶商所過。州縣有重稅。或掠奪舟車。露積雨中。諸道置邸以收稅。謂之揚地錢。

とあつて、武宗時代にも同じ弊害が指摘せられており、諸藩の置店收利が甚だ盛んであつたことを知る。尙、憲宗以後に於ける藩の置店收利はすべて茶に聯關して論ぜられているが、これは茶の商品的流通が此の時代に急激に伸展し、置店の

弊が茶貨に最も大きくふりかかっていたことに由るのであって、置店の藩帥が他の客商の貨財を見逃していたとは考えられない。巡禮行記に跼地店の名を記している開成五年は正に武宗の治世であり、淮西討伐參加諸藩の置店が公認せられた元和九年前後から計えて約二十五年の後である。又この淮西討伐には隣近の諸藩はもとより遠く幽州や河東等の河北河東兩道内の諸藩も參加しているのであるから、置店が此の方面にも行なわれていたと見ることは不可能でなく、従つて河東道の忻州内に藩鎮の店があったと見ても大勢上の無理はない。恐らく巡禮行記の跼地店は此の藩帥經營の店に由來したものであろう。藩營の店として權力を背景とする民營の某家店を競争から却け、利益の獨占態勢を強化し、經過の客商はそこに入る様に仕向けられて商稅分を含む高い跼地錢を支拂わされたので、跼地店の名を以て客商の間に知られ、やがてそれがこの地名となつたのであろう。四半世紀の年數は跼地店の地名化を來すに充分である。

以上、跼(擲)地錢の考察を通じて唐代の邸店がその倉庫施設として場(屋内土庫)を造設していたことを明らかにした。此の考證に於いて資料となつた邸店はすべて藩鎮經營のものに限られているが、それは決して場の造設が藩鎮經營のものに限られていたことを意味するものではない。寧ろ逆に藩鎮の邸店が民間の大邸店を模倣したものと見るべきである。藩鎮の邸店經營を見るに、部内の經驗ある優秀商人を取立てて此れに切り盛りをさせ、當然乍ら民間邸店の慣行に準じて運營せしめていた。施設としての場も亦民間のそれに倣つたものと見て差支えない。

五

宋代に場坊と呼ばれていたものは、夢梁錄^{卷一}場房の項に

略。於水次起造場房數十所。爲屋數千間。專以假貨與市郭間鋪席宅舍及客旅。寄藏物貨并動具等物。四面皆水。不惟

可避風燭。亦可免偷盜。云云。

とある如く、獨立專業の倉庫業者として、客商の商品は勿論のこと、家屋の密集した市郭にある肆舗の商品や一般住家の

貨財道具等を預り保管し、火災・盜難に對する備えを充分にしていたという。市郭の肆舗や一般住家が商品や道具を場坊に預けたのは、繁華雜踏の地はとかく火災が多いので、それをさけるのが大きな理由であつたのであろう。繁華地は地所の入手擴張が難しく、大量の商品や高價な大道具等を安藏しておく建造物を造設する屋敷の裕りが容易に得られなかつた。大都市に於けるこうした家の建て込みも場坊の利用を盛んにする一因であつたであらう。宋代にはこうした專業の場坊の外に邸店がその倉庫に場を備えているものもあつた。先に擧げた夷堅丁志^{卷六}泉州楊客の項に、神罰を恐れた楊客が杭州に持込んだ莫大な商品の安全をはかつたことを述べて

悉輦物貨。置抱劍街主人唐翁家。身居柴垛橋西客館。^中擧所資沈香・龍腦・珠琲・珍異納于土庫中。他香・布・蘇木。不減十餘萬緡。皆委之庫外。

とあり、全商品を主人唐翁の家に預け、自身は別の客館（旅館）に泊り、唐翁の家ではその商品を高級のものと然らざるものとに分ち、高級品を土庫、即ち場内に納れ、然らざるものは土庫外においたという。ここにいう土庫外におくとは屋外に露積する意味ではなく、土庫を包む倉屋内においたと解すべきものである。主人之家とは邸店を指す唐宋時代の盛用語である。従つて右の記事は邸店がその倉屋内に土庫の施設を備えていたことの一事例となる。唐代邸店の倉庫施設としての場に就いて此の様な構造内容を傳えたものは未檢出であるが、恐らく此の唐翁の家に見られるものと大體同じで、唐翁の家の構造様式は唐代邸店の流れを汲んだものであろう。

集居する獨立專業の場坊には數百千間の廣大なものがあつたという。こうした規模の壯大化と共にその構築技術の面にも向上發展があつたであらう。マルコポーロの旅行記に見える貴重品蓄藏用の石造高塔とは石の場、即ち土場よりも更に堅牢な石場で、造場に於ける技術面の進歩を示すものであろう。石造ならば土場よりも更に高く造られ、よつて人目を惹く様な高塔式のものも現れていたのであろう。所で獨立專業の倉庫業者を指す場坊の語は唐代に於いては未だ檢出せられず、ただ邸店の擧收する保管料としての場（闕・場）地錢の語が見出されるにすぎない。このことから直ちに唐代に於け

る場坊の出現を否定することは許されず、或は唐代の文獻史料が宋代に比して懸絶して少ないことに由っているのかも知れないが、然し少なくとも場坊の存在が大きな社會現象にまで發展していなかったと推定することは許されるであろう。果して然らば、唐代に於ける營業用の土場は保管業を基本業務の一とする邸店の所有するものが主體をなしていたことになる。思うに、土場は邸店の業務用施設として生れ、唐から宋の邸店にうつがれると共に、商品流通の發達、大都市の發展等による保管業務量の著増するに連れ、邸店三業務中の保管業務が專業として成立つ様になり、場坊の出現を見るに至ったのであらう。そして場坊中に有力な業者が簇出し、壯大堅牢な場が築かれて人目を引く様になり、よつて物の本にも記される様になったのであらう。宋代には一所千間もの壯大な場坊の集りや石造の高塔的場が現れていたとすれば、既に長安・洛陽・江陵・廣陵等の百萬を越す大都市を擁し、十萬戸數十萬人級の都市に至つては十指を屈するに餘りあつた黃巢の亂以前の唐代に於いては、そうした大都市に保管業の獨立化の傾向が生成しつゝあつたのではないかと思われる。何れにしても專業保管倉庫としての場坊は邸店の基本的三業務の一としての保管業から分離發展したものと解せられるのであるから、その分離過程の推移に就いて一考しておく必要があるであらう。

宿泊・食飲に併せて倉庫業務を扱っていた、というより寧ろ客商を最大の顧客としていた關係からその商貨の保管を併せ扱わねばならなかつた邸店は、特に高級品を保管する爲の場を備える必要があり、初めは邸店の倉屋内、もしくは店舎に連接する倉屋内の一部にそれを設けていたであらうが、此れが次第にできにくい場合を生じ、邸店倉庫から離れた所に別に倉庫や場を設けるものが出て來たと思われる。こうした推定の裏付けとなるのは唐代の中頃から急速となつた都市人口の膨脹、特に大城邑に於ける人口の充實とそれに對應して生じた城市の住戸の過密化である。城壁を以て圍まれた唐代の州治や縣治は、城内を坊市に區切られ、坊内は寺觀や住宅の地に充てられ、邸店や肆舗は市（城市）區内に集められる制度となつていた。都市人口が充實し諸坊の住戸が激増すると、此れに對應して城市内の邸店や肆舗も増加して行つたが、やがて限られた城市内ではその増加が限界に達し、邸店肆舗の新設や擴張の用地は入手し難くなり、市區からはみ出

して住宅地區の坊内や城外にまで進出して行つた。此の様な情勢のもとで新たな開業や營業の擴張をはかる城市内の舊邸店はその倉庫土塲を邸店より離れた所に分置し、比較的長く保管するもの等はそこに收容する方法をとる外なかつたと考えられる。閑空の所に設けられた倉庫は、店肆の密集する城市内に大火災が多かつた事實から見て、長期保管の場所として寧ろ歡迎せられることもあつたであらう。先に述べた如く、境内の廣い寺院の土塲が大量の錢や絹の保管場所として利用せられていたことは、此の推定を立てる參考となる。城市の狹隘化はそこに密集する肆舗の土地入手をも困難にし、從つて機に投じ大量の商品を仕入れた場合、それを置く肆屋のゆとりがなく、これを邸店に預け、當分賣捌きをしない豫定の品は火災等の危險が少ない城市外閑空地の倉庫土塲に預けておく者を増して行つたであらう。太平廣記卷四雜傳記部・無雙傳に、涇原藩の兵が長安城内に亂入して天子が蒙塵するといふ大騷動に際し、租庸使として國家の財入を掌つていた劉震一家も目ぼしい家財をまとめて急遽逃げ出すこととし、娘の無雙の許婚者王仙客に持出す家財の運送隱匿を指揮せしめたことを述べて

乃裝金銀羅錦二十駄。謂仙客曰。汝易衣服。押領此物。出關遠門。覓一深隙店安下。我與汝舅母及無雙。出啓夏門。

繞城續至。仙客依所教。至日落。城外店中待久。不至。云云。

とあり、二十駄にも及ぶ大量の金銀羅錦を城外で然も人目に立たない所にある店に預けしめている。勿論、小説中の記述ではあるが、現實社會の實景を採入れたものに相違ないから、此れによつて店がその宿泊者のみならず、その他の一般からも寶財その他の預り保管を引受けていたこと、そうした店は城外にまで出現していたこと等を察することができる。右の例は兵亂という非常事態の場合であるが、宿泊者以外の者が安全度の高い邸店にその貨財の保管を依托することは、平時に於いても肆舗や一般富民によつてかなり一般化しており、従つてそれに應じた倉庫・土塲の用意ができていたに相違なく、さればこそ二十駄もの寶財を急遽城外深隙の店に隱匿することができたものと見るべきであらう。宋代の大客商楊客の話を載せている夷堅志の先掲記事中に

悉釐物貨。置抱劔街主人唐翁家。身居柴垛橋西客館。云云。

とあって、邸店の唐氏が他の客館に泊っている楊客の大量の商貨を預り保管したことが見えるが、この様に邸店が宿泊客以外の者の貨財保管を引受けることは唐代に既に見られた所であろう。こうした客商の人貨別處、肆鋪（坐賣）や一般住民の保管依托は倉庫業の分化獨立の傾向と相表裏するものであり、その背景に都市の大發展、即ち繁華地の住家過密化、商品取引量の巨大化があったのであるが、この住家過密化、商品取引量の巨大化は唐代後半期の大城邑に於いて顯著に見られる所であったのであるから、倉庫專業者の出現傾向は恐らく唐代に既に見られたに相違なく、その專業化は邸店の倉庫業部門の獨立という形をとっていたと考えられるのである。

註

- ① 本稿は唐代の邸店に關する筆者の總合的研究の一部として組まれたものであり、邸店に就いて本稿内に史料を示すことなく論斷している部分は、筆者としては必ず實證の上に立つたものである。以下の部分に就いても同様である。

- ② 加藤博士「支那經濟史考證上卷」所收、「唐宋時代の倉庫に就いて」。

- ③ 註②に同じ。

- ④ 邸店や旅館の主人は客に對する主人の意味で、盛んに主人と呼ばれ、それより主人の家は邸店や旅館を指す語として盛用せられる様になっていた。

- ⑤ この禁止を示す史料は後文にその一例を引用する。

- ⑥ 商税に就いては社會經濟史學三〇卷六號所載の拙稿「唐代商税考」參照。